

承前

「亜唯子^{あいこ}さん。どうされましたか？」

『ヘルパーくん』は、『レイくん』の声で訊^きく。

「こいつは嘘つきだ！ 騙^{だま}されるな！」

「機械を信用するな！」

「おまえは、兵器にされるぞ！」

霊たちは、口々に大声で騒いでいる。亜唯子は騒^{ホレゲー}霊^{ガイスト}という言葉^を思い出していた。ラップ音を立てる霊ならともかく、喚^{よび}き散らす霊なんて前代未聞だ。

「亜唯子さん。反応が異常です。落ちついてください。落ちついてください」

『レイくん』の声は、必死に呼びかけているが、その割に声は平静だった。緊張した声はもともと出せないのだろう。

「わたしは、落ちついていきます」

亜唯子は、精一杯ふつうの声を出した。

「反応が異常です。パニックが起きかけているようです。鎮静剤を投与させてください」

『ヘルパーくん』の背中からよきによきと千手観音^{せんじゆかんのん}のように多くのアームが出て来た。

「騙されるな！ 薬なんか打たれたら、最後だ！」

「そいつを、ぶっ壊せ！」

霊たちは、『ヘルパーくん』には聞こえないブーイングを浴びせる。

「嫌よ」

亜唯子は、少し考えてから、霊たちのアドバイスに従った。

「わたしは、だいじょうぶだから」

「でも、モニターされている脈拍、血圧、発汗などが、危険な数値を示しています」

『ヘルパーくん』は、懸命に説得する。

「亜唯子さんに万一のことがあつては、たいへんですから」

「そいつの、お為^{ため}ごかしを信用するな！」

「おまえを、人間としては見ていない！ 兵器として心配しているだけだ」

亜唯子は、ちよつと首を傾^かげた。

「鎮静剤は、打ちたくない」

「我が儘^{まま}を言わないでください。世界の運命は、あなたにかかっているのですよ。新しい『悪^{あく}鬼』に対抗できるのは、あなただけなのですから」

姿は『ヘルパーくん』だが、声は『レイくん』そのものだった。そのアンバランスさに、吐き気が込み上げてくる。

だが、もし、それが自分の使命なら。

どうせ、わたしの命は長くない。引き換えに、大勢の人の命を救うことができるのなら。

「馬鹿なことを考えるな！」

「おまえは、いいように利用されるだけだ！」

「そいつを破壊しろ！　そして、ここから逃げ出すんだ！」

霊たちは、亜唯子に詰め寄った。

「うるさいわね！」

亜唯子は、耳を押さえて、大声で叫んだ。

「亜唯子さん。どうされましたか？　今の反応は、私に対するものではないようですが？」

『ヘルパーくん』が、機械としてはこれ以上ないくらい、怪訝な声を出した。

「わたしは……何でもない……ただ、わたしは」

すると、聞き覚えのある声が、すぐそばで響いた。

「亜唯子、亜唯子。私だ。いいかね？　このままでは、おまえは死ぬ。使い捨てにされるんだ」

「お父さん！」

亜唯子は、声を出した霊の方を向いた。

父は、最初に病室に現れたときのように、くっきりと鮮明な姿は見せてくれなかった。なぜか、霊の数が増えるにつれて一体ずつはほやけてしまっている。

「わたしは、どうせ死ぬのよ？　だったら、せめて、他人の役に立つ死に方をしたいの」

「人は、いざれ死ぬ。誰かを救おうとして死ぬのは、とても尊いことだ。だが、やつらの言いなりになって将棋の駒しやうぎにされるのは馬鹿げている。私は、自分の娘がそんな死に方するのは認められない！」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「亜唯子さん、亜唯子さん。どうか鎮静剤を打たせてください。ますます、数値は危険な領域に

入っています！」

『ヘルパーくん』が懇願する。

「おまえは、ここを出なさい」

父の霊は、静かな口調になって亜唯子に告げる。

「そして、自らの意志で行動するんだ。一人でひっそりと生きていくにせよ、『悪鬼』と戦うにせよ」

亜唯子は、うなずいた。ようやく心が決まったのだ。

「わかった。そうする」

「ご理解くださって、ありがとうございます。それでは、鎮静剤を打ちます」

『ヘルパーくん』のたくさんのアームがすばやく伸びた。亜唯子は、そちらを睨んで、久しぶりに精神を集中する。

金属製のアームは、亜唯子の周囲に張られた見えないバリアに弾き返された。次の瞬間、根元から吹っ飛んでしまう。

病室に、アラームが鳴り響いた。

「亜唯子さん。やめてください。落ちついて」

アームが千切れて煙を上げている『ヘルパーくん』が、『レイくん』の甘い声で囁く。

「いつもの亜唯子さんに戻って。どうか、お願いします」

「叩き潰せ！」

亜唯子は、『レイくん』ではなく、霊の声に従った。

病室の扉をこじ開けると、廊下には、もうもうとした煙が渦巻いていた。

「だいじょうぶ、火事じゃない」

父の声が、囁く。

「防犯用のスモークだ。吸い込んでも害はない」

でも、念のため、風を起こして煙を吹き飛ばして進んだ。廊下は、突き当たりで左右に分かれていた。

「右だ」

根拠があつて言っているのかどうかはわからなかったが、亜唯子は、父の声に導かれてさらに進む。

「次は左」

廊下は、迷路のようになっていた。脱走を防ぐためか、外部からの侵入に備えてなのか。

すると、廊下の途中で、急に父の言う。

「このままでは、絶対に外には出られない」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「その壁を壊せ」

亜唯子は、分厚そうなコンクリートの壁に向かって念を投射する。ピシリと音がして、ヒビが入った。続いて、二つ目のヒビ。すべては、中央の一点でつながっている。やがて無数のヒビが放射状に入った。

コンクリートは、向こう側に向かって吹き飛んだ。後には車が通れそうな大穴が開いている。

「行け。ここから、逃げろんだ！」

亜唯子は、穴から外に出る。そこは屋外で、足下は芝生しげだった。目の前には山が迫っており、たくさん木々が茂っている。時刻は夕方、景色は薄いブルーに包まれつつあり、空気がひんやりしていた。

亜唯子は、走り出そうとしたが、足が付いてこずに前のめりに転倒してしまう。だが、地面に激突する寸前に、身体を宙で止めた。

「運動不足だな。それに、念動力も、すっかり錆び付いているようだ」

父の声が、肩越しに優しく響いた。

「でも、まだ念動力の方が役に立ちそうさ。飛べるか？」

「はう」

亜唯子は、両手を翼のように広げ、宙に浮き上がった。脳裏には、あのワタリガラスをイメー
ジしていた。

そのときになって、ようやく、建物の方から慌あわただしい騒さわぎが聞こえてきた。
のんびりしていると、捕まってしまう。

亜唯子は、頼りない両脚で大地を蹴ると、一気に百メートル以上飛び上がった。

さらに、ぐんぐん高度を上げると、すでに地平線に没していた夕日が見えてきた。

「どちらへ行けばいいの？」

「どうしたいんだ？」

「『悪鬼』を斃なす」

「だったら、東だ」

巫唯子は、夕日を背負って飛び続ける。周囲はすぐに夜の帳とばりに閉ざされ、頭上には満天の星が燦きらめいた。

こんな爽快感を味わうのは、久しぶりだった。

わたしは今、生きています。

自分の意志で戦いの場に向かっているのだ。

薄く冷たい空気に、肺が悲鳴を上げかける。風で涙があふれたが、まったく気にならなかった。それから、なぜこんなに気分がいいのか気がついた。

どんなに抑えようとしても止めどなく続いていた念動力の漏出うしだつが、びたっと止まっているのだ。やはり、止めようとするのが間違いだった。方向を定めて逃がしてやればいいのだ。

もちろん、四六時中、念動力を使い続けることはできない。しかし、少なくとも短時間であれば、周囲の世界に破滅的な影響を与えずに済むかも知れない。

だったら、たぶん、だいじょうぶだ。

巫唯子は、自分に言い聞かせる。

わたしは、『悪鬼』を斃ころすことができる。

だが、さっきまでうるさいくらいに話しかけてきた父の霊は、なぜか沈黙していた。

フロアを包んだ閃光せんこうは、たつぷり二、三秒は続いただろう。

龍司りゅうじは、目を開ける。持てるすべての力を、閃光を作ることに費やした感覚があった。身体に

力が入らない。声すら出せなかった。

怜央は、どうなったのだろう。美歩と春彦、マコちゃんは。

周囲を見回すと、怜央の姿はなかった。春彦は、目を押さえようとずくまっている。俺が閃光を出すのは予想できただろう。龍司は、腹を立てた。おまえが戦闘力を失って、どうするんだよ。

美歩は、目を閉じていたらしく、まっすぐに龍司を見た。さらに、胸に抱きしめていたマコちゃんも、無事だったようだ。こちらは、フラインプリーだ。

「怜央は、逃げたのか？」

龍司は、何とか蚊の鳴くような声を絞り出す。

「たぶん、向こうへ行っただけ、目が元に戻るまでの、せいぜい一、二分よ。今のうちに逃げなきゃ！」

美歩は、マコちゃんの手を引いて、怜央が逃げたのとは逆方向に走り出す。

「……待ってくれ」

春彦は、ようやく立ち上がった。目尻から涙が流れ出ている。

「行くぞ」

龍司は、春彦の手を引いて、美歩たちを追った。早く回復しないかともどかしかったが、よく考えると、春彦の視力が戻ったときには怜央も同様だろう。その意味では、こいつは、相手の状態を示すバロメーターだ。

エスカレーターに乗って降りているとき、後ろから声が追ってきた。

「ふざけやがって……!! おまえら、必ずぶち殺してやるからな!!」

春彦が何か怒鳴り返そうとしたが、龍司は制止した。わざわざ、こちらの居場所を教えてやることはなし。

「今のは、何だ？ 誰がやった？」

四人は、なるべく音がしないように、エレベーターを駆け下りていった。春彦は、目を閉じたまま、龍司にうまく歩調を合わせた。

「おい。待て。戻ってこい！」

恰央の声の調子が、少し変化した。

「おまえの言ってたことは、もつともだ。たしかに、不律を殺すためには、おまえたちの力が必要になるだろう。……今戻ってきたら、許してやる。約束するよ」

ワニの約束を信じた方が、まだマシだろう。

「なあ、何とか言えよ？ 黙ってるのは、敵意の印か？ このまま何も言わなかったら、おまえたちは渋谷EZの敵だ」

エスカレーターを乗り継いだとき、龍司は春彦の顔を見て、はっとした。

うつすらとだが、目が開いている。

ということは、恰央も……？

爆発音が響き、天井が崩壊して、破片が落下してきた。

もう、だめだ。龍司は両手で頭を覆う。頼みの綱の春彦は、上を向いて、何とか破片を逸らせようとしていたが、まだ完全には見えていないため、大きなガラス片が四人に向かって降り注いだ。だが、次の瞬間、まるで見えない傘を広げたかのように、ガラス片などはカーブを描き、そっ

ぽへと流れていった。

どうして、助かったんだ。

龍司は、春彦、美歩と順番に見て、最後にマコちゃんに目を向ける。

「君だったのか……」

マコちゃんは、子供特有の不敵な顔で、ニヤリと笑った。

(つづく)